

## 今日からの物語について考える

### The Story from Now On

クリストファー・ロイド（作家/歴史科学者）入江経一 小林茂 城一裕

Christopher Lloyd (Writer / Historian), IRIE Keiichi, KOBAYASHI Shigeru, JO Kazuhiro

**Abstract** This text presents a record of a talk event which is held as a part of IAMAS open symposium “Innovation in 137 hundred million years”. In this talk, we discuss the story from now on with a specific emphasis on IAMAS and Japan according to the keynote speech of Christopher Lloyd “Whole history from the Big Bang to the Present Day”.

**Keyword** Christopher Lloyd, History, IAMAS, Japan

城：では第二部を始めます。はじめに、クリスさん、非常に示唆に富む興味深いお話をありがとうございました。第二部のテーマは、第一部の講演を踏まえて「今日からの物語について考える」ということになります。今回の講演の内容には、期せずしてわれわれが IAMAS の中で現在話し合っていることと共通する部分が非常に多くありました。例えば七年後に予定されているオリンピックに向けて、日本の経済や政治、教育の中でさまざまな動きがある。さらに十年後、十五年後、二十年後、この IAMAS という学校はどういう方向に向かえばよいのだろうと議論しています。137 億年という長さから見ると、七年も二十年も近視眼的なものかもしれませんが、それでも歴史からまなぶという視点には非常に勇気づけられるところがありました。IAMAS の教員はもちろん研究者であり教育者であるのですが、入江先生でしたら建築、小林先生でしたらデザインエンジニアリング、というように各々得意とする分野を持っています。その点を踏まえて、まず入江先生と小林先生からクリスさんへ質問をしていただいて、それを受けて更なるディスカッションを進めていきたいと思います。では、はじめに入江先生、よろしくお願いします。

入江：137 億年の旅行の中で、いろんな新しいことに気付かされました。わたしは建築家ですが、私の質問は教育についてです。「教育とは何のためにあるか」という大きな問題は、知識を次の世代に伝える、それからそれをより良く発展させるためのものだと思うんですけど、三つぐらいの視点でそれについて考えてみたいと思います。

一つ目は知識のあり方。わたしはデジタルの時代とその前の時代の両方を経験している人間ですけど、明らかに知識のあり方が違っている。かつて知識というものは、覚えるもの、記憶するものでしたが、今はアクセスするものですね。このような違いは、人間のあり方そのものがそっくり変わっていくような大きな違いなのだろうと思います。テクノロジーの発達でネットからどんどんと入ってくる知識と人間がどうやって付き合っていくのかということも含むし、例えばネットで流れている TED とか MIT の授業など、かつては閉じられていて外から見れなかったものへ、アクセスできるようになっています。知識のあり方が大き

く変わろうとしている、しかもそれは止めることはできないだろう。

二つ目の話ですが、現在の制度が通用しなくなっていくと思うんですね。現実が大きく変わって制度が時代遅れになり、本来の目的である、より良く管理したり発展させるという目的には沿わないものになっている。たとえば学校が学科によって構成されていたり、一学期二学期という中でカリキュラムがあり、特定の学生が入学する、そういう既存の制度に対して、今新しい教育の機会がたくさん生まれてきているわけで、それが一体どうなっていくのか。

三つ目は、最初の二つとも絡んでいますが、評価の問題です。IAMAS では修士制作の発表会がありました。その発表会では「評価表」というのを配られて、制作についてアイデアやコンセプト、進み具合、今後の将来性、といったいくつかに分かれた項目を「数字」で評価するんですね。これはとっても気持ちの悪いことだなと思います。数字に還元することで個人を評価し、また数字を集計して順番を付けるためです。これからの社会の中でこのような評価というのは本質的に有効なのかどうかと思うと、とてもそうは思えないわけです。今の教育制度の中にそういう評価の枠組みがあるわけだからやらざるを得ない。これからの時代というのは、こうした評価そのものを全く違うように考えていくべきじゃないかなと思います。情報社会の新しい教育のあり方にはそうした可能性や希望がたくさんあると思います。今までなかった方法も実験できる。ロイドさんが教育についていろんなチャレンジをされていると伺っていますので、是非ご意見をいただきたいと思います。

ロイド：そうですね、同じ問題がイギリス、アメリカ、そして全世界的に見られるんじゃないかと思います。評価をただ単に数字に落としてしまうということ。これは先ほどお話しした短視的な視野を持ったがゆえの現象ではないかと思っていますが、そういうことが起こっています。しかし実際には、この評価の方法というものは文化的に変化してきています。例えばインターネットを使って全世界の人たちの評価を得ることも可能です。本の評価を Amazon で見て、他の人がどんな評価をしているかということをよく読んでいます。ですから大学での評価においても、教師陣だけではなくて、学生同士でも評価をする、もしくはインターネットなどを使って他の人にも見てもらうということによって、マーケットから、若しくは多くのオーディエンスからのフィードバックを得る。そうすることによってより全体的な、バランスの取れた評価をしてもらえるのではないのでしょうか。そのような評価のあり方、そしてその評価の結果というものは、学生にとってはより価値のあるものになるんじゃないかと思います。

城：会場からの質問の中に「IAMAS の学生に対しての提案があれば教えて下さい」というものがあつたんですが、まさに今のお答えはその解の一つになっていると思う反面、「学生同士の評価」を取り入れた場合、われわれプロフェッショナルとしての教員に果たして何ができるのかという疑問も浮かびます。その点に関して何かご意見があればお聞かせください。

ロイド：往々にして教育をする側には学生が正しいか正しくないかを判断する傾向があると思うんですが、これは自然ではないと思うんですね。もっと自然なかたちというのは、経験したことをともに共有してゆくということではないかと思います。以前は弟子制度であるとか、子供が親と一緒に学んで経験を分かち合っていくということがあつたと思うんですが、

そうしたことを今学校や大学でももう一度行っていいんじゃないかという動きがあると思います。先生が、若しくはプロの教育者が、何かガイドを与えるような人、師のような存在として、いろいろなアイデアを提案していったり、異なるアプローチを生み出していくというのは良いことだと思いますが、ただ教育者がジャッジのようなかたちになって良いとか悪いとかを判断するようになると、学ぶ人の気持ちは非常に弱くなって、モチベーションが下がってしまうんじゃないかと思います。

入江：点数を付けているときに、学生を罰しているような気分になるのが嫌だなと思ったので（笑）、今のサジェッションは非常に良かったと思います。もう一つ気になっていることが、今の教育は一人の人間がどれだけ優秀になれるか、そして優秀かどうかを評価するシステムになっていると思うんです。だけどこれからの社会では今よりももっと、一人の人間が何かを成し遂げるということより多数の人間が知識やアイデアを共有したりすることで何かを達成していくと思います。ところが今の教育機関は一人の人間のスキルなり知識を問題にして、人材を育成するという方向になっている。そういう方向というのは、どうも今の社会の動きとはズレているんじゃないかと思いますが、それについてはいかがでしょうか。

ロイド：教育だけではなくてビジネスもそうなんですが、学校でも大学でも何であれある機関というものは、物事を繰り返し繰り返し行うように非常に強く形作られているので、変化しにくい、柔軟には対応しにくいところがあると思います。しかしインターネットが登場して、ここに変化のチャンスがあるのではないかと思います。インターネットによって、より柔軟なかたちで学習を共同して行うことが可能になってきていると思います。そこで、より若い学生たち取り込むために、そしてより成功する卒業生を作り出すために、変化をしなければならないという圧力が今各機関にかかっていると思うんですね。そして変化していった暁には、学生たちは変化したかたちでの共同作業というものを自分たちの中に取り入れるということになっていると思います。

城：機関、組織が変わろうとするとき、そのもの自体が妨げる原因となるという指摘はその通りだと思います。その中でこの IAMAS は、非常に小さな組織であるがゆえに、変わることに対する抵抗が非常に少ない。現に学生の皆さんはまさにそれを肌身で感じていると思うんですが、毎年カリキュラムが少しずつ変わり、試験の仕方も毎回違う部分もある。その意味においてわれわれはこれからの教育機関の姿を真っ先に示すチャンスをもっているのかもしれないなと思いました。次に小林茂さんのほうから質問をお願いします。

小林：今の入江さんからの質問に対するディスカッションが非常に興味深かったので、そこに対するコメントを先に述べてから質問したいと思います。「教育」とか「教育機関」とか一般的には言われるわけなんですが、最近一部の人が言っているように、「エデュケーション（教育）なのかラーニング（学び）なのか」という議論があって、だんだんウェイトが教育から学び、ラーニングのほうに移りつつあるんじゃないかと思っています。IAMAS にはプロジェクトという授業があって、この授業ではそれをリードしている教員がいろんな進め方をしているんですけども、ぼくが今いちばん力を入れてやっているのは、学生と一緒にチームを組んで、ある課題、それも外部から与えられた課題に取り組むということです。これ

は非常にスリリングで、ぼくが答えを知っていてそちらのほうへなるべく効率良く結びつけようということではなくて、ぼく自身も答えを持っていないような難題に対して取り組むということで、失敗の可能性も大いに含んでいます。しかしここ数年間は、そういったリスクも含めながら、同じプレイヤーとしてやっていくということに取り組んでいます。それが良い成果に結びついているかどうかということについては、正直なところあまり自信はないんですけど、今のクリスさんからのお話にあったような様々な変化を感じる中で、やっぱりぼくたちも少しずつ変わっていかねければならないという中からそんなことを考えています。

ここからは質問になるんですけど、クリスさんが先ほどの講演の中で何度も紹介されていた「ロングタームシンキング」、長い時間軸で考えていくということを最近あちこちで耳にするような気がするんですよ。例えばぼく自身も五月にサンフランシスコに行ったんですけど、その時にブライアン・イーノというミュージシャンが作った **Long Now** という財団の展示スペースを訪問する機会がありました。そこでは砂漠の砂の中に埋める完全機械式の時計で、一年に一回しかカチッと一言なくて、千年の時を刻むというものを作ろうというプロジェクトがありました。彼らのプロジェクトが始まったのは、西暦で言うと 1996 年なんですけど、その前にゼロを一個くっつけて、「01996」年に始まった、というふうにすることで千年というスパンを考えながらやろうというもので、非常に面白いプロジェクトだったと思うんですね。そのようなロングタームで考えていこうというものをよく耳にするのは、たまたま自分が最近関心を持っているからそういうものばかりが気になるということなのか、それともそこに考えをシフトしていこうという人が増えているということなのか。クリスさんは世界各国でそういった講演をなさっていると思うんですけど、そのように考え方を变えていこうということが世界のあちこちで起きている動きなのかということと、そしてクリスさんがロングタームの考え方に興味を持った個人的な理由あるいはきっかけがもしあればお話いただけたらと思います。

ロイド：コメントありがとうございます。そうですね、今おっしゃっていただいた通り、世界中にそういった新しい意識を持つ人がどんどん増えているということ、ある意味でのルネサンスが起こっているということにわたしは気付いています。新しく「ロングタイムビュー」、長期的な視野を持つ人が増えてきていると思いますし、これは一つには情報に対するアクセスが容易に可能になったというところからきていると思います。あるアイデアを生み出した人がそれを世界的な動きにしていくまでが非常に素早くなったと思うんですね。そういった意味で、新しい意識を持った人が非常に増えていると思います。わたしが個人的に長期的な視野を持つようになったその理由は、わたしの子供との関わりにあるんです。子供たちは本当に繰り返し繰り返しいろんな質問をわたしにしてきたんですが、中にはわたしが答えられないものもありました。そこで書店に出向いて行って、いろいろな歴史について書かれた本を探したんですが、例えば科学のことについては科学のセクションに行くと本を探してくださいと言われます。そこにはビックバンから始まって、プレートテクトニクスの説明があってそれから人類の誕生までの本があるんですね。ところが人が登場してくるとまた違うセクション、歴史のセクションのところに行って 7000 年前の中東の歴史から始まった本を選ばなければいけない。それで分かったのは、すべての物語を網羅した本はないということでした。そこでわたしは自分で科学と歴史を兼ね合わせた物語を書いてみようというふうに思ったわけです。科学と歴史を合わせることで、つまり人類誕生以前からの歴史を振り返ることに

よって、新しい見方を得ること、偏見無しで人間のことを見るができるようになりました。人間は、人間を見るとき、いろんな文明や環境に影響を受けたその後の人間だけを見てしまい、人間は自然の力とは関係がないと思いがちですが、それ以前の歴史から見たとき、人間はコントロールをしているのではなくて、様々な自然の影響を受けているんだということが分かったんです。

城：ありがとうございます。ロングタームへの関心というところで、一つにはインターネットの影響があるのではないかということ。もう一つには、第一部での福島のパーパー加藤の加藤さんご夫妻のお話ではないですが、永続的に問題なく続くと思っていたものが破綻し、ある種の終わりが見えることによって、より長期的なものへの関心や気付きというものが起きたのかなと思います。そのきっかけは日本では311かもしれませんし、アメリカで言えば2008年のリーマンショック以降の流れがそのロングタームへの関心に大きな影響を与えているのかもしれません。

ここで会場からの質問を一つ投げかけてみたいと思います。

お話の中で、男性性というものが現状の様々な問題の原因になっているということがありました。ただ、われわれの半分は男性です。しかし性別を変えるということは少なくとも今の医学においては難しい。その中で、半分が男性というわれわれに今後何ができるのか、女性化していくということが推奨されるのか、それともそれ以外にわれわれに何かしらできることがこれからのロングタームな考えの中にあるのでしょうか。

この質問にお答えいただければと思います。

ロイド：これはわたしの個人的な意見ですが、わたしたちは男子であれ女子であれ、やはり同じ人間であるというふうに考えたいんですが、実際には男女のあいだには違いがあります。進化の過程の中でどのように行動するかというプログラムが違ったかたちで出されているんですね。驚くべき事実は、わたしが殺人を犯す可能性は、金山先生が殺人を犯す可能性よりも十倍高いということ。それはわたしが男だからです。これまでの殺人を見てみると、十件のうち九件の犯人は男性で、女性は一件だけです。これは先ほどお話した男性ホルモンがやはり機能していて、別に殺人ということではなくても、ビジネスにおいても教育においてもある種の男性的な行動をしてしまうということがあると思うんです。おそらく近代社会以前、もしくは石器時代にはもっとバランスの取れたかたちで役割がシェアされていたんだと思いますが、当時のようなかたちで、また時間がかかるかもしれませんが、為していくことはできると思います。しかしそのためにはやはり教育が必要です。女性が仕事に行っているあいだに男性がもっと子供の面倒を見るというふうに教育をする。もしくは男性がもっとオープンなかたちの、男女にとって良い、新しい組織を作る機会を受け入れるようにすること。時間がかかるかもしれませんが、そうしたことが可能だと思いますし、これが日本やイギリスでできれば、本当に素晴らしくエキサイティングなことだと思います。

城：ありがとうございました。入江先生、小林茂先生のほうから、今までの話を受けて、何かコメントがありましたら、お聞かせください。

入江：もちろん、大きな環境的な問題が目の前にぶら下がっていて、どうやって乗り越えたらいいかということは誰もが考えていることだと思うんですけど、温暖化だとか、人口問題だとか、アジアの問題だとか、いろんなことがある中で、今こういう明るい希望があるということがもしあったら教えていただきたいと思います。

ロイド：わたしは希望は持っています。と言うのも、人類には新しい世界に対応していく力があるからです。人口が増えているとか、資源が乏しいとか、そして多様性、文化といったような、いろんな問題にわたしたちはずっと取り組んでいるわけですが、わたしたちには非常に効率的にコミュニケーションを取る力があります。それはこの歴史の中にも表れていますし、そしてわたしの本にもそれは表れていると思うんですが、わたしたちはそういったコミュニケーションによって様々な長期的な視野を持つことができるのです。現在の短視的なあり方というものの、これはわたしたちは希望を持ってないということではなく、一つの通過されるべき状況なのではないかと思います。ですからわたしたちは今後問題を解決できるような状況を作っていくことができる。そのようにわたしは考えています。

小林：ぼくはこのシンポジウムをきっかけとして、『137 億年の物語』を読んだんですけど、たぶん 20 世紀の話って本当に最後のわずかなところだと思うんです。改めて読み直してみると、例えば女性が参政権を多くの国で得たというのも、本当にわずかここ数十年くらいだったという、まあ当たり前と言えれば当たり前なんですけど、ぼくらが「最近」ということを思ったときに考えている時間というものは、実は非常に短いスパンだったんだということを、この本を読む中で思いました。この本を書いていく中でクリスさんが最も驚いたことがもしあれば、教えていただけたらうれしいです。

ロイド：イギリス人がいかに世界でひどいことをしたかということに気が付きました（笑）。学校で教えてもらわなかったことです。イギリスの学校では、王様や女王様や科学者など、自分たちの素晴らしい歴史について学びますが、それだけが全てではありませんでした。これは大人になって、自分で努力をして探してみても初めて本当にどんなことがあったかということがわかったんですね。イギリスの中で例えば中国のアヘン戦争について学校で学んだという人はいないと思います。ですからわたしは中国人のビジネスマンとイギリス人のビジネスマンが毎週テーブルで何か商談をしているのを見るといつも本当にすごいなと思うんですね。たぶんイギリス人はアヘン戦争のことを知らないで、「中国人は人権を蹂躪している、信用しないぞ」と心の中で思っているんですね。中国の人のほうは逆に、まず彼らが学校で習うのはアヘン戦争のことなので、「この憎きイギリス人め、信用しないぞ」と思って育っているわけです。

城：今のお話は日本についても言えることで、日本人が知らない日本の歴史も、もちろん色々あると思います。イギリスからいらっしゃったクリスさんから見て、「今日か

らの物語について考える」上で、日本が世界の中でユニークな部分、特に希望に満ちたユニークさを持っているのであれば、それについてコメントをお願いします。

ロイド：日本には素晴らしい力があると思います。長期的な問題を解決していくための非常に大きな力を持っていると思います。まず非常に驚いているのは、キリスト教とイスラム教の影響を受けていない類い稀な素晴らしい文化を持っている、世界の中でも類を見ない国であるということ。そしてもう一つは、日本は自然との関わりが非常に深いということです。その理由の一つとしては、この日本という国が地理的に見てプレートの上に位置しているということが挙げられる。ですから時に非常に劇的なかたちで、人間はいかに弱い存在であるかということを自然から知らしめられるわけです。明日何が起こるか分からない、こういう状況はイギリスにはありません。このようなことから、日本人は長期的な視野を持つことができるということが言えると思います。そして三つ目ですが、日本の人々は、ものづくり、ものを生産するということに非常に長けていると思います。ですから今後何か新しい技術が必要になれば、そのときは皆さんの出番だと思うんです。日本には技術があります。技術を作ってそれを世界に売っていただければいい。石油もない、ガスもない、そして原子力発電所も止まっている今となっては、皆さん、もっと頑張って代替エネルギーを作ってください。暇にしている場合じゃないと思います。しかし、一つ日本に欠けているものは、こうしたことを現実にするためのリーダーシップです。

城：ありがとうございました。今の言葉は希望に満ちていると同時に、このままただ座っていればいいというわけではないということを示してくれました。まだまだ話したいことは沢山あるのですが、時間になりましたので、以上をもちましてシンポジウム「137億年の物語」そして「今日からの物語について考える」を終わりにします。